

日本のポンペイ

〱 渋川市の遺跡を探る 〱

No. 5

『空沢古墳群』

空沢古墳群は、中筋遺跡の東側に広がる古墳群です。現在までに57基の古墳が発見され、榛名山の6世紀初めの火山灰と6世紀中頃の軽石とをはさんで営まれています。

古墳群の中心は、5世紀後半代の円墳群で、火山灰以前の古墳は43基。この段階の古墳は、中筋遺跡の集団が営んだと考えられます。径22^{メートル}ほどの中型円墳2基が北寄りの高所に築かれ、その南側に径15^{メートル}前後の円墳や径10^{メートル}未満の小型円墳などが次々と築かれます。古墳同士の間を埋めるように、積石塚や、床面に石を置いた棺座のある木棺墓、普通の木棺墓、竪穴式小石室が築かれます。古墳群の西側では、3条突帯の大型円筒埴輪が出土しており、大型の盟主墳が存在したと推定されます。



空沢古墳群(第3号墳)

積石塚や棺座のある木棺墓は、朝鮮半島の墓制に系譜が求められます。また、韓式系土器や叩き目のある土師器壺、大阪産の須恵器把手付椀など、渡来人との関わりのある遺物も出土しました。行幸田城山遺跡では、この時期に山間部での放牧が行われていたと考えられており、積石塚の被葬者は、馬の飼育に関与した技術者かもしれません。

中筋遺跡を壊滅させた6世紀初頭の災害のダメージは大きく、古墳造営は一時大きく後退しますが、6世紀末に再び古墳造営が盛んとなります。径7^{メートル}前後の円形積石塚が11基構築され、埋葬施設は竪穴式石室から横穴式石室へと移行していきます。積石塚は北寄りへと集中し、この時期に積石塚の被葬者が再編成されたことがうかがえます。

(渋川市文化財保護課)